

十（獣の影に踏みこむ）

小さいときからつい最近まで、一人ぼっちだった。

ちようど——この休養室の御簾みすのようだと、一条蒼泉いちじょうみずみは思った。

何人も人はいるけれど、それぞれ簡素な御簾で遮蔽されている。

御簾を開けて人の領域に入り込むと、その人は傷を負っている。

いたずらに触れてはいけない。自分も同じように傷を負っているから、入ってきてほしくない。

こんな状況では何百人いようと、一人ぼっちと何も変わらない。

祖母の言うことには、自分の母親は、京の色街で左褌ひだりつまを取る芸妓げいこさんで、ヒュージ襲来の際に、まだ三つだっ

た自分をヒュージに差し出してその隙に逃げたそうだ。

婚外子だったため、その方が「都合がよかった」らしい。

奇跡的に自分は助かったのだが、祖母はそんな母親のことを、自分の娘でありながらそれをヒュージに差し出すなんて、鬼畜生おにちゆうせいのようだ、ヒュージに劣る夜叉やしゃだと、呪詛の言葉を吐き続けながら食事を作り、呪詛の唾がかかった料理で自分を育てた。

後に母親がヒュージに捕食されたと聞いて、自治体が犠牲者の合同供養をした時も、祖母は和尚わしやうにもらった位牌を、可燃ごみの日に捨てたという。

祖母は、おばあちゃんだけは蒼泉ちゃんの味方だよ、味方だよと言って、子猫を愛でるかのよう可愛がっ

てくれた。

しかし、祖母の本心を知りたくて、瞳の奥の奥——網膜まで覗きこんだが、見えなかった。何かに曇っていたのだ。

その曇りは、先入観だったり、嫌悪感だったり、好奇心だったりといった、自分を見るフィルムター。結局蒼泉にとつては、母親も祖母も、みんな御簾というフィルムターの向こう側の存在だった。

御簾を開けて心を覗きたくもないし、入ってほしくもなかった。

学校に入ってから、ヒュージに見逃された人間として疎んじられた。どうやら祖母が、幼少の頃の逸話を、母親憎しと近所に触れて回ったのが災いになったらしい。

友達は出来なかったし、御簾の向こうの存在だから、作ろうとも作るべきとも思わなかった。

どうせ誰も彼も、網膜を覗いたところでフィルムターがかかっているのだ。

近寄つて来ない子に至つては、網膜を見る必要すらない。

ヒュージの襲来でクラスメイトやその家族に死者が出る度に、ヒュージに見逃してもらった“化け物の寵愛を受けた者”として嫌がらせを受けるものだから、いつしか蒼泉を包む御簾は幾重にも連なり、やがて蒼泉自身も、御簾に包まれて見えなくなつた。

孤独も迫害も悲しかったけれど、悲しいときに悲しい顔をする、表情が脳にフィードバックされてより悲しくなることに気づき、表情を顔に出すのをやめた。

表情なんて、要らなくなつた。

蒼泉は高校進学の際、教師に嘆願して、リリイになるべく鹿野苑高等女学園を選んだ。

あまり強いという評判のないガーデンがよかつた。

戦いの最前線に立ち、ヒュージの前で刺し違えて死ぬ。

なんなら食べられてしまってもいい。

それが蒼泉にとつて、自分にフィルターをかけてきた者たちに対して、命まるごと熨斗付けて突つ返す抗議になると考えたのだ。

晴れて鹿野苑高女への入学が叶い、五月には新入生兼リリイ兼僧侶見習いという身分になった。

入学式の後に、結縁灌頂という儀式を行った。目隠しをして、大きな胎蔵界曼荼羅の上に花びらを落とし、落ちた先の尊像が自分の守り本尊となる。

阿闍梨様に手を引かれて、やつてみた結果は――。

あれだけ祖母が母親を擲揄した、夜叉だった。

仏法を守護する前の夜叉は、人を食らう激しい鬼神だったとも聞いた。

結局どう嫌悪しようとも憎悪しようとも、夜叉の娘は夜叉なのだ。

蒼泉は、いよいよ分厚い御簾で自分の心を覆った。

誰も自分の疵なんて知らなくていい。知らせてなんかやるものか。

しかし、学校独自の『阿吽の陣』という制度で上級生とルームメイトになったとき、その上級生は、蒼泉の纏ってきた御簾が、まるで初めからとろろ昆布であったかのようにふわりと蕩けさせた。

――飛鳥井翼彩。

二年生とは言っても、誕生日がたった四日しか違わない。学年度によって隔てられているだけで、実質ほぼ
同じ年である。

むしろ四日しか違わないのに、自分と較べて子供っぽ過ぎるし、天衣無縫に過ぎるし、軽率だし、薄識だし、

下級生のようだと思った。一挙手一投足に振り回されてしまうことも多い。

仲良くする気はなかったし、パートナーだとしても遠い距離を置いていようと決めていた。でも、最初の戦闘で怪我をしてしまったとき、翼彩は蒼泉の腕に包帯を巻きながら言った。

傷ついたり折られたり、辛いことがあったら、一緒に笑おうね——と。

なにひとつ頼る要素のない言葉だったけれども、それが逆に嘘がなくて胸がすいた。

翼彩の網膜の奥底が見えたとき、ひとつも曇りなんてなかった。

そう思ってしまうと、なぜかだんだんと彼女の声が、深い色の瞳が、柔らかな下降線を描くピンクの目尻が、ショートヘアときめ細かい頬の肌が、小さな身体と小さな手が、細い足が——すべて心地良く感じるようになった。

授業で、『啐啄同時』という言葉を覚えた。

啐は親鶏、啄は卵の中の雛。悟りを開こうとする弟子を絶妙な好機で導く師を、殻の中から突く雛鳥とその音を聞いて殻を破る親鶏になぞらえた禅語だ。

言い換えれば、需要のタイミングにピッタリと合った供給、と言ったところか。

翼彩様はひよこひよこと言われているが、自分の方がひよこだ。

ひよつとしたら、自分は殻の外から突付いてくれる翼彩様を求めていたのかもしれない。

その為に、これまでの人生を我慢して歩んできたのかもしれない。

ようやくと気がついた。私は人を信じたかったんだ。人に安心したかったんだ——と。

自分が死ぬのは、ヒュージの前で人生を呪うときではない。翼彩様を護るときだ。

存在価値が出来たみたいで、少しだけ自分自身が好きになった。

翼彩様を護る力を得られるなら、人を食らう夜叉になってもいい。

気がつけばもう、翼彩様のことしか考えられないようになってしまった。

だからといって――。

今日みたいに、ちよつと翼彩様が自分の期待に外れる言動をしてしまっただけで、あんなに感情を露わにするのは、いけないことだと思った。

彼女への想いを押しつけていけないと誓っていたから。

想いを押しつけると表情に出る。表情を出すと、自分がとろりとした芯のない液体にでもなつて、翼彩様の体の隅から隅にまわりつかなくては生きていけなくなるよう、別れが辛くなるから。

そうでなくとも、歳を経るとともに、リリイとしての能力も衰えていく。いずれガーデンも八部衆も阿吽の陣も、卒業という形でお役御免になり、少なくともシステム上、翼彩様と自分をつなげるものは何もなくなってしまう。

女同士なんだから、赤い糸なんてあるわけがない。あるとしても、自分が心のなかで一方的に描いた赤い線ではない。

結婚できるわけでもなし、どうしても、翼彩様との別れは訪れる。

――結婚――？ 何を言っているんだろう。世迷い言だ。

でも。それでも。

翼彩様と、ずっと一緒にいたい。

「――結婚？」

御簾を開けて、洗面器と救急箱を持った円覚えんかくが入ってくる。脇にはタブレットも抱えていた。

へっ、うわ、うわあつ——と蒼泉がたじろいだ。

声を出して独り言を言っていたことにやつと気づいた。

「あんさん、なんとなく翼彩はんに似てきはりましたな」

蒼泉は恥ずかしくなつて、布団に顔を埋める。

——どの辺りから声を出してたんだらう。

背中診るから起きてくれはりますか——と言いながら円覚は座り、ぬるま湯の張られた洗面器にタオルを浸して、ぎゅうと絞る。

保健室の先生——いわゆる養護教諭にあたる阿闍梨あじかりが、今日は光トポグラフィでマジの資質を計測する勉強会だか学会だかで席を外しているため、円覚が代わりに看護を担当しているのだ。

蒼泉は円覚に支えてもらつて上体を起こし、白い浴衣寝間着を脱ぎ、包帯の巻かれた上半身をはだけさせる。

——この寝間着、死装束みたいだな——と思つた。

そう言えば、翼彩様に、〃普段よりも一歩だけ死に近い部屋〃だなんて言つたことがあつた。厭な言葉を使つてしまったな、と軽い自己嫌悪に陥る。

あれは、授業で九相図くそうずという絵画を習つたときに、その影響で言つてしまつたんだと思う。

私はべらつべらに薄い人間だな——と自己嫌悪に陥つた。

円覚が、蒼泉の上半身に巻かれた包帯をほどいていく。そして背中に貼られた膏薬を少しだけ剥がして、よっしゃ大丈夫と言つた。

「この膏薬の効能が切れたあたりでもう完治つてとこやろね」

ありがとうございますと言つて、蒼泉は円覚にぺこりと頭を下げた。

「輝礼きれいはんとこの怪我きがいどした三人は、そんなに深こうないけど切り傷きりきずやさかい、四、五日は安静あんせいにせんといかん」

「けつたいなヒュージが音声模写おんせいもがなんぞしよるから——とこぼしながら、円覚えんかくは蒼泉そうせんの胸から背中に包帯ほうたいを巻き直す。

「そや、漢方薬くわんぱうやくの冬虫夏草とうちゆうかそうつてありますやろ？ 怪我きがいどしたみんなにあれの煎じ茶せんじちやを飲んでもろて——強壯薬きやうざうやくやさかい、元氣げんき出してもらお思うてんのやけど、虫むしから草くさが生えとるのが氣味きみ悪わるいとかゆうて、飲のんでくれますかどうか——」

円覚えんかくのありがた迷惑めいわくな提案ていせんを聞いて、一刻いこくも早く元氣げんきになつて休養室きゆうやうしつから出なければ——と蒼泉そうせんは戦慄せんりつした。虫むしの部分ぶぶんまで飲のむわけではないから、氣きにしなければ氣きにならないのだろうが、想像さうぞうするだにお世辞せじにも風味ぜっか絶佳ぜっかというイメージはない。

「と、冬虫夏草とうちゆうかそうつて高価こうかな漢方薬くわんぱうやくなんですよね？ 戴たいく訳わけには——」
速回すみまわしに断ことわつたのだが、円覚えんかくは、心配しんぱいおまへん、最近さいきんは島根県産しまねけんさんで、津和野式冬虫夏草つわのしきとうちゆうかそういう養殖やうじくものがあり
ますよつてに——と返かえした。

素直すなはに私も氣味きみが悪わるいですと言いえばよかつたと後悔こうかいした。

蒼泉そうせんが浴衣ゆい寝間着ねまぎの上半身じやうはんしんを再び羽織はねおりり、息いきを吸すい込んだあと。

あの——と小首こくびを傾かためて円覚えんかくを見た。

「なんどす？」

「お手当てあてしていただけるのはうれしいんですが、本当ほんとうは今回のヒュージについての聞き取り調査ききとりさうさですよね」
円覚えんかくが申し訳わけなさそうに、ちよいと感かんじたことだけ聞きかしてくれはりますか、と言いつた。

高階円覚たかしなえんかくという阿闍梨は、正体不明のヒュージが出ると、どういう訳だか、しばしば蒼泉のところに聞きに来る。今日みたいに戦闘後であったり、戦闘前の情報未確認状態であったりとタイミングはまちまちだが、いずれも阿闍梨や八部衆が集まる公式の会議ではなく、こうやって二人きりのときに相談をされる、といった具合だ。

なぜ自分を頼ってくれているのか——蒼泉にはわからなかった。

自分はまだ十五歳で、人生経験にも見識にも観察力にも判断力にも自信がない。愛想がいい訳でも可愛げがあるわけでもない。

自分の意見などなんの足しになるといふのだ。

強いて言えば、ヒュージ討伐の議論で意見を言うことが、結果的に翼彩を助けることになる——そのくらいの意識と意義モチベーションと士気しかない。

今日にいたっては、ついさつきまで恋敵だと思っていた相手なので、あまり話す気も乗らなかったが、本来いい人であると思っているし、人と人の軋轢は、よつく話すことで親しみに昇華すると聞いたことがあるので、とりあえず、今日の出撃で思ったことを述べることにした。

「あのヒュージは音声模写の能力に優れていて、輝礼さんや焰蘭さんの声を完全にコピーしていました。澄調さんは九官鳥のようだと言っていました。私はコトドリを思い出しました」

オーストラリアにいるコトドリという鳥は、優れた音声模写能力を持っていて、人間がコトドリのいる森に親子で来たら、親は子の名前を呼んではいけないと言われていて、子どもが迷子になったときに、親の声を真似たコトドリに誘われて、誤って森の深いところに迷い込むことがあるから——という記述を、蒼泉はどこかの本で読んだ記憶がある。

言葉だけでなく持鈴の音まで真似ていたから、声ではなく音なんやろうね、と円覚が頷く。

「あんさんらが帰還してるときに、波形や声紋を見てみたんや。ほしたらまあ——うちのリリーの子らの声を比較用にサンプリングしていたわけやないんやけど——人間の声そのもんやったわ」

「だとすると——」

蒼泉の問いかけに円覚も、だとすると？ と復唱した。

「ヒュージが歌う御詠歌の声の主は——誰なんでしょうか？」

そう言うとき蒼泉は、すかさず円覚の網膜の奥を覗いた。

信頼できる人物ではあるけれど、少し——不透明に感じた。

「さあ——わてもさっぱり見当がつきまへんな」

蒼泉は、円覚の網膜をもう一度見つめた。

「お心当たり——あるんじゃないですか？」

「いや、ようわからんよ。ほんまに」

それは嘘です、嘘か隠しごとか、何かから眼をそむけているだけです——と言いながら、蒼泉は掛け布団をぼんと叩く。

「だつてそうでしょう。まずこの御山がヒュージの拠点だとしたら、御山で『追弔和讃』ついでちようわさんを歌える人が、ヒュージとごく近い場所にいると思うはずですよ」

そこはわても思ったのよ、と円覚が親指と人差し指を立てる。

蒼泉が、ほらやっぱり隠してましたと、無表情で言った。

「この御山には、鹿野苑のほかにもお寺があると教わっていますすが、宗派はどこでしたっけ——」

円覚は、どことなく気まずそうに——浄土真宗と曹洞宗やね、と口ごもりながら答えた。

「ですよね。円覚様もご存知のとおり、浄土真宗では『追弔和讃』は歌いませぬ。曹洞宗は『追弔和讃』ではなく『追弔御和讃』ですよね。歌詞も全然違います——となれば」

歌ったのは、うちのガーデンの関係者だと思っんです——と無表情で言った。

円覚には、頷くことしかできなかった。

「それはまあその通りやもしれへんけど、そもそもあれ——何の生き物がベースになったヒュージどすやろね」
露骨に話を逸らした。

何らかの真相にたどり着きたくないかのような。

やっぱり隠したがつているように、蒼泉には思えた。

何かを隠した状態で、都合よく自分が知りたいことだけを聞くなんて不公平だ。

「音声模写して、真っ白な身体を幽霊画みたいに伸ばして、爪で髄液をすすするヒュージなんて、データに居いしまへん」

等級かてあんな身体の長いもん、ミドル級かラージ級かわからへん、と言いながら、円覚が新種ヒュージエツクシートの新規ファイルを開く。

ヒュージ自体が、既存の生物とヒュージ細胞が融合して生まれた新生物であるため、阿闍梨は結構な頻度で新種のデータを新規ファイルに登録する作業を強いられる。登録内容は対象ヒュージの大きさを表す等級だけではなく、例えばがん細胞の判定基準で、進行度を表す『ステージ』の他に、画像診・細胞診などで、悪性度

を表す『グレード』を見定めるように、細かいスペックを交戦後のリレイから聞き取り調査して、データを省庁や全国のガーデンとシェアするのだ。

「体表は対レーザーコートになつとるタイプですか？」

「そういう印象はありませんでした。ただレーザーにしても打撃にしても、傷つけたそばから傷口が別の筋織維に覆い尽くされていくので、致命傷を負わせるのは難しい気がしました」

「どんな感触やった？」

「焰蘭さんは触り心地や繊維質の感じから、裂けるタイプのチーズに似ていると言っていました」

「ああ、さけチーとかふざけてましたな」

蒼泉は円覚の声を聞きながら、枕元に眼を遣る。

視線の先には、翼彩が焦がした、山菜とキノコの凶鑑があった。

もし翼彩がキノコを使った料理でも作るなら、ひよつとして参考になるかもしれない、などと考えて貸したものだ。

よく考えたら、どこの世界に料理の参考と言って凶鑑を貸す者がいるのかと、自分の人間としての膨らみのなさに恥ずかしくなった。

表紙を見ながらぼつりとつぶやく。

「私には、あのヒュージが菌類——キノコの一種に見えました」

「キノコ？——まあ、榎茸の軸とかエリンギの繊維ってあんな感じやしなあ——」

蒼泉は、左開きの凶鑑を手にとってページをめくる。

右下が焦っていたが、開くと当然ながら、見開きの左右が焦っていた。それでも読めないことはない。

キノコの頁をめくって、あれでもないこれでもない、眼で追う。

そして、あ——とつぶやいて、眼の動きを止めた。

「なんや似てるの、おましたか？」

本を覗きこむ円覚に視線を遣らず、いえ——さつき円覚様が言つてた冬虫夏草を見ました、とつぶやいた。茶色くて長くて、長い莢豌豆きやえんどうを日干しにしたような見た目である。

「草っていうけど——キノコだったんですね」

「そや。キノコが昆虫に寄生して、昆虫が死んだあとも養分を吸い続けて生長するんや」
ふうん——という調子で、無言で軽く首を縦に揺らす。

自分の本なのに、意外と読んでないページがあるんだなと思った。
ページを捲ろうとして、一瞬思いとどまった。

焦げた部分も出来る限り読みたくなつたからだ。

そして蒼泉は、一枚の半分変色した写真を見て、息を吸い込んだ。

「なんや似てるの、おましたか？」

再び本を覗きこむ円覚に。

この、オニゲナっていうのに感じが似ています——と言つた。

「オニゲナ？　これがヒュージに？」

ページの中の本文を見ると、オニゲナなんとかという学名の珍しい菌類だと書かれている。

ヒュージの胴体の、真つ白で細長く、体表に長短の傘がまばらに生えているところ、顔——のような部分の眼窩にびっしりと生えた突起など、オニゲナそのものとは断定できないが、蒼泉の頭の中のイメージには強く合致した。

写真は何枚か載っているが焦げてるため、写真の解説文、いわゆるキャプションが読めるのは一点だけだった。

『一九××年 山形県最上郡○○村にて撮影』と書かれている。

お願いがあります、と言って蒼泉は凶鑑を閉じた。

「どないしました」

「十四年前から十六年前にこのガーデンで亡くなった——あるいは行方不明になった、山形県出身の方はいらっしやるかどうか、僧籍を照会していただけないでしょうか——？」

円覚は、なんで十六年前やの——と尋ねた。

「一番最初の事案は十四年前でっしやる？」

「ですから、十四年前から十六年前の範囲でお願いします。もし二年おきに事案が起きているのなら、十四年前からさらに遡って、ヒュージが現在の形態になる出来事があったのではないかと思っただけです。できれば当時の交戦記録も見たいです」

円覚は、なんで山形県やと疑問を投げた。

「たまたま凶鑑のオニゲナの写真に、山形県最上郡○○村で発見されたと書いてあったから——それだけです。どなたかがオニゲナの菌糸を持ってきてしまったかもしれないですから」

可能性が払拭できれば、別の地域の発見事例と、その出身者を当たっていくだけです——と、蒼泉は無表

情のまま答える。

円覚は、観念したかのように大きいため息をつく。

「蒼泉はん——あんさん今どこまで見えとりますのや」

「それは、私の台詞です」

円覚は人差し指でかりかりとうなじを搔いて——この話しとうなかつたんやけど、と言いながら、タブレツトの僧籍名簿検索画面を開いた。

十六年前のデータを指でスワイプしながら照会する。

「十六年前というのは、まだ鹿野苑高女がただの真言尼寺で、ガーデンでも学校でもなかったころやね——」

田舎の尼寺でしかなかったのが、どこから何の噂を聞きつけたのか、学校や家庭内で虐待を受けた子や、生活が荒れて行き場を失った子、ヒュージ被災など何らかの理由で、到底地元や家庭に住める状態ではなくなつた少女たちがぼつぼつと寺に駆け込んで、いつしか小規模な女子コミュニティになった——と聞いたことがある。

しかし、ヒュージの襲来とシンクロするように、そこで暮らす尼僧たちにマギの力が発現したことで、文部科学省の対ヒュージセクションが目を付けて、鹿野苑高等女学園という学校法人兼リリイ養成機関、いわゆる『ガーデン』に昇格したのだという。

「わてらより上の世代やね。寺に駆け込んだ女の子たちを俗世に連れ戻さんようにするから、その代わり、寺にガーデンや学校の機能を持たせるように——いう取引があったんやろね」

お茶持ってきますか？ という円覚に、大丈夫ですと断る蒼泉。

「その話を聞くと、初めから行き場のない子の駆け込み寺であるという噂が流布されたこと自体、リリイの素

質がある人材を集めるための、省庁の方々の計画ではないのか——みたいなイメージが湧きますね」

私が担当の官僚ならそうします、と蒼泉はつぶやいた。

円覚が、あんさんもえげつないわ——と言いながら、タブレットを蒼泉にはい、と手渡す。

「蒼泉はん、山形県出身で、十六年前に在籍していたリリイは二人おました。この人たちの話をしたくなかつたさかい、ちよいと逃げとつたかもしれんね——堪忍やつしゃ」

右にスワイプするともう一人見えます——という円覚の声を聞きながら、蒼泉はタブレットの画面を見る。光が下方から蒼泉の頬を青白く照らす。

布宮志げ（ぬのみやしげ） 山形県村山市出身 —— 〇〇年九月十九日【破門】 消息不明

二戸晶良（にのへあきら） 山形県最上郡出身 —— 〇〇年九月十九日【破門】 消息不明

モノクロ写真だった。

証明写真ではなく、とある日常のスナップ写真をトリミングしたようだ。少しピントがぼけている。

布宮志げ——という人は、細面の顔立ちに黒目勝ちで切れ長の目が笑みをたたえていて、まるで博多人形を思わせる。写真では剃髪している。

二戸晶良——という人は、モノクロ写真なのに白粉でも塗っているのかというほどの色白で、おかつば頭の団栗眼。どこか生気の抜けた笑顔のようにも、寂しそうな表情にも感じられた。

「この二人——阿吽の陣なんでしょうか。どうして破門に——」

円覚は——言いつらそうに口ごもりながら。

不邪姪戒を破らはったんや——と告げた。

蒼泉の心臓の鼓動が高まった。

「真面目な子たちやったらしいんやけどね——」

不邪淫戒とは、仏教で定められている五戒、つまり戒律のひとつだ。

殺生を禁ずる不殺生戒、盗みを禁ずる不偷盜戒、嘘偽りを禁ずる不妄語戒、飲酒などを禁ずる不飲酒戒、そして淫らな行為を禁ずる不邪姪戒がある。

「具体的に、なにをしたんですか？」

円覚は、せやから、この話嫌や、とこぼした。

「まあ、昔でいうところの？ Sって言いまっしやろか——まあ、同性で愛してしもたんや」

S いうのはシスターの略で——昔は女の子同士の——などと口ごもる円覚の網膜を、蒼泉は覗き込む。

「同性を好きになるのは、破戒ですか？」

「出家得度を受けた僧侶が同性愛に耽るのは破戒と言われとるけど——かの弘法大師様も男色を嗜まれとつたちゆう説もあるくらいや。わてはよう気にせんよ。LGBTなんて言葉も知られるようになって、同性愛もいらずらに迫害されたり好奇の目に晒されるだけやなくて、色々議論しはるようになったし、そもそもうちの寺、そないなの多いんどす。多いんどすけど、この二人の場合は、その、度が過ぎて不道德な——ええと、わかりますか」

頭に血がのぼる感触を覚えた。蒼泉は赤面していると自覚した。

視界のピントが一瞬ぼやけた。

「なんとなく——伝わりました」

タブレットを布団に置き、開いた両手で紅潮した頬を冷やす。

度が過ぎるほど同性を好きになるのが破戒なら。

同性を、頭のとつぺんから足指の先まで口づけをしたくなる衝動にかられることが破戒なら。

私も、破門に値するくらい罪深いのだろう——蒼泉の心臓が強く鼓動した。

炬燵で寂しがり屋の肩を寄せあい、こすれ合った二の腕がどれだけでもくすぐったかったか。

絡み合った冷たい冷たい脚が、どれほど私の心を温めてくれたか。

不邪姪の破戒が密告によって発覚したとき、阿闍梨様たちと大揉めに揉めはったらしい——と、円覚が伝聞を思い出すかのように語る。

「お寺側は嚴重注意で済ますつもりやったんやけど、最後は結婚する言うて、手に手を取りあつてここを出て行きはったらしい」

駆け落ちどすな、と付け加えた。

「夢見がちやったんかなあ。破門やから去る者は追わずで、消息不明とは書いてあるものの、正味のところ消息なんて調べとらん。一切の関わりあらずや」

「結婚——ですか」

蒼泉もついさつき、結婚を考えた。

夢見がちと言われても仕方がない。

二十一世紀が始まって少し経ったあたり——まだ人類がヒュージという生物群に脅かされる前の時代、東京の渋谷区が施行した、渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例、俗にいう『同性パートナーシップ条例』によって、同性婚は準結婚の扱いを受けることができるようになった、とネットで読んだ。東京

や京都などの寺院を中心に、日本でも同性婚の挙式が行える場所が増えていく。

しかし、それはあくまで戒律と無関係な人々の話だし、海外での完全なる同性結婚に比べると、人々の心や社会、そして法がカッブルをどう包み込むか、国内ではまだ越えるべき壁があると感じる。

現代で完全な同性結婚を果たすとすると、それが認められている国にでも移住するしかない。渡航費と移住費が払える境遇であるならば、の話だが。

しかし事実婚という言葉もあるとおり、本当は役所に婚姻届を出すだけが結婚ではない。祝言を挙げるだけが結婚ではない。

誰に祝福されなくとも、今日から二人は結婚しました——と契りを交わすだけでも、二人の間では結婚だ。もつと言つてしまえば、そうやって結婚ごっこよろしく決めっこするだけなら、不邪姪戒を破つたことを咎められたときに、黙つて謝罪して心の中で舌でも出していけば、寺を出る必要すらなかったはずだ。なぜ、わざわざ寺を出て行ったのか。

もしも志げさんと晶良さんという若い二人が、誰も考えもしない方法で同性結婚に挑んだとしたら、そしてそれを果たしたのだとしたら、どんな手段を取ったんだろうか——。

すごく、すごく興味がある。
知りたい。

できれば会つて——私にそつと教えてほしい。

「あの、こないな話が本題と関係おまつしやるか。そろそろヒュージの話に——」

「いえ、お話を聞けば聞くほど関係性を感じました。あと、この二人の片方が御詠歌の声の主だと仮定するな

ら、歌の内容が内容、『追弔和讃』なわけですから——」

もう片方のかたは、既に亡くなっている気がします——と言った。
暫く沈黙したあと、せやろね、と円覚は合掌した。

「だとすると、駆け落ちした二人のうち一人は亡くならはって、一人はヒュージに御詠歌を聞かせていたということですか？ やつとることバラバラやないの」

蒼泉は、だから——オニゲナなんですよ、と返す。

「言うてる意味がわからん——」

と言った瞬間に、円覚の顔から血の気が引く。

「ですから、交戦記録が見たいんです。事案を。十六年前の」

蒼泉は円覚にタブレットを返す。探してほしい——という表明だ。

「それがな——まだガーデンとして機能しとらんかった頃の話やさかい、残つてへんのよ。昔はリリイもおらんし、今みたいにCHARMなんて便利な武器も支給されてへん。にわか仕込みの錫杖しやくじょうや独鈷杵どくこで戦つて案の定打ち敗れる——そないな時代や」

現在の鹿野苑の白兵戦術は、古式槍術やお神樂かぐら、果ては能楽まで無節操に採り入れた独特のスタイルが築かれてるが、ただの尼寺だったころは、闇雲に法具を振り回すぐらいしか出来なかつたであろうことは想像に難くない。

「そうですか——ないものは仕方ないですね」

ほな色々おおきにと言つて立ち上がり、蒼泉の寢床の御簾を開けようとする円覚を、すいません——と呼び

止める。

はいな、とタブレットを抱えた円覚が振り向く。

「生き残ったお一人の方の所在、知ってらっしゃいますよね？」

円覚は息を吸い込んでしばらく黙ったあと、情報を最後まで喰らう気なんやね——と、肩を落としながら、しじぶ頷いた。

「あんさんは鬼か夜叉どすか」

「夜叉ですが」

円覚は右腕でタブレットを抱え、左腕で持った救急箱を備品棚に戻し、休養室を出て行った。

蒼泉は、御簾を見つめていた。

——お優しい円覚様に、感じの悪い物言いばかりしてしまった。

——こんな棘のある物言いだから、ブリーフィングのような公式の会議には向かないんだろう。

もし円覚様がはぐらかさないのであれば、初めから、私はキノコの情報を出しますから、円覚様は破門になつた二人の情報を出して下さい交換しましょう、と言えばよかつたのかもしれない。

中途半端な腹の探り合いを展開するよりも、よほど効率よく話が進んだのに。

——それよりも。

破門の二人はどうやって同性結婚を果たしたのか、果たせたのか——そこが知りたい。

——最早、それだけでいいから。

——鬼でも夜叉でもいいから。

文部科学省に今日の交戦記録と所見のデータを送るべく、円覚は有線ネット環境のある寺務所へ向かった。その渡り廊下には、厨房で強く叱責を受けていた翼彩の側にいた、ほのほと調が立っていた。二人が翼彩の処遇に心を痛めているであろうことは、その沈痛な表情から用意に読み取れた。

「翼彩様、やはり破門なのでございますか？」

「ああ——あれどすか」

円覚は、紙包に鬼手佛心と書かれた苦い苦いお薬みたいなもんや——と言った。

「——お薬？」

鬼手佛心の言葉通り、言葉は厳しかったが、その眼は慈愛に満ちていた。

「生きるというのは目隠しで歩くことどす。今こうしてわてらがお互いを見て、その後ろの景色も見ていますけど、そこに何かあるのか、どう振る舞えばいいのかがわかるのは、わてらが知識や経験、教えという名の杖つまり識しきを手に入れていからで、実はわてらは未だに目隠しをしておりますのや。目隠ししながら杖なしで歩けば、最初は誰だつて千鳥足でふらつきながら、壁にぶつかつたり転んだり、勘違いをしたり失敗をしたりします。『暗愚あんぐ』というやつやね。でも、杖によつて間違いが正されるから、人はだんだんと真つ直ぐに歩けるようになるんどす。杖を持たせてくれるのはお経かもしれん、日々の暮らしかもしれん。あるいは自分の痛みかもしれん。今回のような言葉の処方箋かもしれん。そういう経験を経ていくことで、真つ暗な道でもここに何かあるんか、その先に何かがあるんかの見当みあたがだんだんと付くようになる——それが人というもんですやろ。そして道を極め尽くしたときに、ふと目隠しがとれるんや。それこそが悟りであ」

ほのほは、やつべ説法モードに入つちつた——と後悔した。

痺れを切らせた調が、へ長調のアルペジオを奏でてその場を区切る。

「——ようは、翼彩さんを温かく見守る方向ということでよろしいでございますね？」

円覚は、火急の事務がありながら、自分の長説法癖が発動してしまったことに気がついて、罰が悪そうに左右を見ながら咳き込み、要はそういうことでおます——と結んだ。

「じゃあ翼彩っちは四日間——除夜法要までの謹慎処分つてこととお願ひします！」

ほのほが円覚に頭を下げた。

「まあ——灸は据えたから、大人しくなりますやろ。これで一步でも二歩でも成長してくればつたらええんのです」

そのとき、渡り廊下に一人のリリイが血相を変えて入ってきた。

「どないしりました？」

「翼彩さんが——翼彩さんが——」

一人でヒューズを倒しに行くつて、出て行ってしまいました——と言った。

円覚とほのほは口を開けて硬直した。

調は口を開けながら、ペロペロんとマイナーコードのアルペジオを弾くと、ほのほが我に返る。

「弾いてる場合じゃないよ！ 翼彩っち捜しに行くから、うちの八部衆の残り連れておいで！」

戸惑つて自分を指差す調に、そうそうと言いながら食堂院の^{じきどういん}方角を指差すほのほ。

できれば別の隊からも助っ人が欲しいと、調にオーダーを追加する。調は、じゃあ輝凜さんを——と頷く。

円覚も、ひとこと付け加える。

「あ——捜索隊に蒼泉はんは入れたらいかんえ。それと、まだ教えんといてや。手負いやさかい」

理解しました——と言って、調が食道院に駆けていく。

しかし突然、踵を返して休養室のある方向へ走る。

おい、食道院そっちじゃないよ——と叫ぶほのほと円覚の声が遠のいて、最後まで聞き取れなかった。

調は走りながら、ごめんなさいと叫んだ。

翼彩の危機は、やっぱり蒼泉に知ってほしかったのだ。

阿吽の陣であり、親友である蒼泉なら、自分の身に迷惑がかかることになろうとも——翼彩の危機を知っていたと思うはずだ。

自分が満身創痍の青息吐息であっても、ほのほの身に重大な危機が訪れたら、調はその状況を知っておきたいと思うだろう。同じだ。

渡り廊下を抜けて、がたがたと入口の簀子すのこを鳴らしながら、慌てて休養室に入る。

肩で息をして、気管をはあはあと鳴らして、調は病室を仕切る御簾を横に少し避けては怪我人の顔を確認して、また別の怪我人の顔を確認する。

今日の負傷者は、輝礼隊の三名と焰蘭隊の蒼泉の計四名のはず。

しかし、三名しか見当たらない。

えっ——えっ——と動揺しているうちに調は、“御簾がかかっているのに人がいない空間”を見つける。

その空間には、綺麗に畳まれた布団と。

厨房で見かけた、焦げかかった山菜とキノコの凶鑑だけを残して、蒼泉の姿はすでに消えていた。

調は——大変でございませす——と叫び声をあげた。

(続)

十(獣の影に踏みこむ)PDF版

発行日 2018年3月19日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
